

# 木と共に生きて

## 細田 安治

■8■

### 父からの問い

1956年(昭和31年)4月、晴れて明治大学を卒業した私は、厳父に「お前、将来はどんな事業をしたいのか」と質問された。言葉の意味は、「これからは木材業も多角化しなければならぬ、お前は何をやりたいのか」ということだった。

私は、製材関係はほぼ極めた。工員の仕事も大概の事はできる。山積み担ぎ出し人足も川並み河岸揚げ、オガ出し、皮むきなど極めた。と自負していた。厳父の言うとおろ、これからは、木材の高度利用で付加価値を高めねばならないと思つた。

細田は製材から木工、そして乾燥までやってきた。これからは、それぞれ製材品をそのまま納入するのではなく、鉋削り加工品を作つて大工さん、家具屋さんの手助けをしよう。次に木材を乾燥するには自然乾燥では時間がかかる。これではお客さまに迷惑だ。人工乾燥してお客様の手助けをしようと考えた。

細田は製材木工乾燥の木材の総合メーカーとして、ここまで来た。次にやりたいことは何だ。厳父の頭に当時、木場の大工場のうち、S木材、A木材、O産業の3社が製材木工乾燥の設備を持っていたのだ。

### 次はベニアだ!

木場内で考えられていたのは、ウロン製材の次はベニアではないかとの流れであった。SとAはベニア工場を計画中であり、生産開始目であった。

地方の港湾都市では、我先にとベニア工場が生産を開始していた。世の中は朝鮮動乱

## 清水港合板へ修行

後の停滞期から、次の高度成長への準備期間のような時期であった。

ウロン丸太の大半はベニア向けだが、製材もまだ播磨期であり製材用はベニア不適材が流通する程度であった。

アピトン材は自動車、鉄道貨車、客車のボディー材用に大きな需要があり、木場の大工場はアピトンのボディー材とベニアに目が向いていた。

細田は、朝鮮動乱後の不況による業績不振でじつと我慢の時期だった。A、Sにベニアで先を越され、負けじ魂の人一倍強い創業者細田三郎は、いつかは、とうか近い将来に「細田もベニアを作るんだ」との、気概をもってチャレンジを狙っていた。

こんななかで、私は大きな仕事ができるぞ、やるからには日本一のベニア工場を作り

たいとの思いが強くなってきた。製材、木工乾燥は極めて、次に細田が目指すのは木材の高度利用だ。ウロン丸太は手慣れている。製材もベニアも同じようなものだ。設備は大きく変わるが、いわは親戚のようなものだ。こんなことを考えているうちに、だんだんベニア生産製造がやりたくなってきた。

そして厳父から、お前、何を

をやりたいのかと聞かれたとき、即座に「ベニアをやりたい」と言った。

このときは、いつも私を叱つてばかりいた厳父がニコツとして、「よし、お前はベニア工場へ修行に行つて来い、嫁さんももつて子供ができるまで帰ってくるな」と言われた。修行先は、静岡県清水市にある清水港合板というベニア会社で、丁稚奉公小僧として見習いに行くことになった。

静岡県は、浜松市の気賀町が祖父祖母の出身地である。私も1年間、小学校に通つたのでなじみの県だ。私にとつて、気賀も清水も同じ。隣町と考へ、「よし、一丁頑張つて、ベニアを極め、木場に帰つて一益超えすぞ」と燃え上がり、気合いを入れ、柳行李一つで、清水港

合板に入社した。事務所は倉庫の2階にあり、6577人同居の大部屋独り身寮がドアひとつで区切られているだけだった。

丁稚小僧の覚悟

立派な会社だと思つて行つたが、実態は、地方都市の町工場に毛が生えた程度だった。しかも、この会社は創業者である早川某氏がベニア事業に失敗、再建中の会社だった。

56年(同)の就職難の時代。私の初任給は日給で1800円、1九月25日働いて4500円。当時の大卒銀行員の初任給は56000円の時代とはいへ、低い水準だった。ベニアをしっかりと覚えるとの意気込みで、給料は問題ではなかった。

この時代は第1次高度成長時代の始まりで、経済日書に「もはや戦後ではない」とま

で記された時代だ。若手社員にはやる気満々の青年が多く、彼らとの交流は勉強にもなったし、今でも楽しい思い出となっている。

この会社の経営は駿河銀行からI氏が専務、清水の物流を一手に握る鈴手から経理部長が常勤し、東京のN商店からはN重役(こちらは非常勤)で経営を取り切っていた。

しかし、岩戸景気の発生によって対米輸出向けベニア板需要が急増し、ドアサイズ、2X8、3X8、3X7など注文が殺到した。さあ大変だ。生産性も低い会社は急に変われない。納期というか、輸出の船積み日は決まっております、間に合わないれば船は待つてくれな。

必死になって働いたが、大元のロータリーで作る表単板が剥けども剥けどもベニアの表面板すなわちフェースが出てこない。

なぜかと言へば、ボルネオの丸太は、ピンホール穴の周りが真っ黒に変色したのが多くこれでは、表板ができなかつた。裏板と中板ばかりではベニア板はできない。このアンバランスを埋めるために、徹夜に次ぐ徹夜の網渡りで船積み間に合わせた。

◇ここで教訓1 材料の仕入れには万全を期さなければならぬ。

◇ここで教訓2 大元の材料が滞つては、仕事にならない。生産は常に材料が手元になければならない。

※編纂部注 当時、南洋材を総称してウロン、合板を総称してベニア、マレーシア、インドネシア産材を総称してボルネオと呼んでいた。

◇次回回は29日付 細田木材工業(株)会長



港合板事務所前で。作業服姿が筆者